２０２４年４月２１日　青戸教会　「わたしを愛するか」

聖書　イザヤ書６２章１～５節、ヨハネ福音書２１章１５～２５節

高橋克樹牧師

復活した主イエスは、３度目の顕現において、故郷のティベリアス（ガリラヤ）湖畔の岸辺で、炭火をおこして、弟子たちをパンと魚での朝食に招いた（２１章９節）。その朝食後、炭火を前にして、シモン・ペトロを名指しで問答が始まったのでした。主イエスはペトロに対して３度も同じ内容の質問「わたしを愛しているか」と問うたのでした。

主イエスの「愛していますか」の問いかけの最初の２回は、言語ではアガパオーという動詞が用いられています。このアガパオーは神の愛を表すアガペーの動詞形です。つまり、主イエスはペトロに対して神への愛と同等の愛でもって、自分を愛しているのかと問うたのです。ところが、ペトロはそれに対する答えでは最初「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」（１５節）と答え、２度目の問いかけに対しても同じ答え方をしている（１６節）のです。ここでの「わたしがあなたを愛していることは」の「愛している」と答えている動詞は、フィレオーという動詞です。このフィレオーは友愛を表す「愛する」という意味の動詞で、米国の都市であるフィラデルフィアのもとになった言葉です。

復活した主イエスが神に対する愛の熱情をもって「わたしを愛しているか」と問われたのに対して、ペトロが友愛のレベルを表すフィレオーで答えていることは、これまでヨハネ福音書を読んできた読者なら理解できます。

ヨハネ福音書１３章３６節以下を見ると、シモン・ペトロがイエスに「どこへ行かれるのですか」と問うた際に、「あなたのためなら命を捨てます」と答えているのですが、イエスから「はっきり言っておく。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないというだろう」と言われてしまいます。果たして、１８章でペトロは大祭司の屋敷の中庭で炭火にあたっていた時、門番の女中がイエスの弟子の独りであることを指摘されてイエスの弟子であることを否んでしまい、さらに、三度もイエスの弟子ではないのかと指摘された際にもイエスとの関係性を打ち消したのでした。こうして主イエスはペトロたち弟子たちに見捨てられて十字架上で殺されたのでした。そのような弟子たちに対して復活されたイエスは弟子の筆頭格であるペトロに「わたしを愛しているか」と問うているのです。ペトロが、過去の自分のふがいなさを顧みるならば、イエスのアガパオーの問いかけに、同じアガパオーで返答できないことも了解できるのです。炭火の前でペトロに問いかけている以上、ペトロが３度否んだ事実を想起させていることは明らかです。

けれども、主イエスは３度めの問いかけでアガパオーを用いないで、フィレオーを用いてペトロに問いかけるのです（１７節）。いわば、主イエスはペトロの愛の水準に落として「わたしを愛しているか」と問い直しているのです。ペトロは主イエスを３度否む前は非常に傲慢だったと思われます。自分は主イエスの一番弟子で、主イエスのことは自分が一番よく理解していると自負していたのです。たとえイエスと一緒に死ななければならない事態になったとしても、自分は決して主イエスを裏切ったりしないという傲慢さが彼にはあった。それが、現実の危機的な状況に直面してみると、いかにも自分は弱い人間であることに直面せざるを得なかった。

この傲慢さは実は私たち信仰者も現実世界で生きていく際に、この傲慢さと同じような生き方をしているのです。例えば、自分が生きていく上では、自分の力で現実を切り拓いていくべきだと考えているところが私たちの中には厳として存在している。逆に言えば、この世で生きている自分は弱いと考えてしまう背景にも、先ほど申し上げたような、自分の力で切り拓いていかなければならないところを、自分が弱いためにそのような生き方ができないという敗北感があるのです。

けれども、このような理解の仕方は、ペトロの立場に立ったものの見方です。主イエスの問いかけに対してペトロが３回とも、「わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と同じような回答をしていることに注目したいと思います。ペトロにとって、主イエスとの関係性においては、舞う

大前提として「主イエスが私を愛している」という恵みの事実が厳としてあることを踏まえていたからこそ、「わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」という答え方をしているのです。神の立場から見るならば、ペトロの弱さは、単に人間的な弱さではなくて、神の愛に応答しきれない人間の弱さを表しているのですが、そのような人間的な弱さに左右されないで人間を愛する神の愛が主イエスを通して、わたしたち人間界に現わされたのです。

オスカーワイルドの小説に「幸福な王子」という作品があります。

ある町の広場に立派な王子の象が立っていました。その像は金でおおわれており、王子の目は青いサファイヤが、剣のさやには赤いルビーがはめられていました。町の住民は、それを見てなんて美しいことだろうと思っていました。ある日、一羽の燕がその像の足元に泊まりました。南に行く途中で仲間にはぐれて一人ぼっちになってしまったのです。津ベガ休んでいると、冷たいしずくが落ちてきました。

何だろうと上を見上げると、そのしずくは王子の涙だったのです。王子は言いました。「私が生きていた時には、涙を流すことはなかったが。今の私にはこの町で苦しむ人たちの悩みが良く見えるので、涙を流さないではいられない」。そして、「向こうの貧しい家で病気の男の子が苦しんでいる。お母さんは働いているけれども薬が買えないんだ。燕さん、私の剣からルビーを抜いて届けてくれないか」と頼みました。燕はそのルビーをその家に届けました。燕は優しい温かい気持ちになりました。次の日、王子は燕に貧しい若者に自分の目となっているサファイヤを届けるように頼みました。サファイヤを受け取った若者は、「誰かが僕を励ましてくれている」と喜びました。次の日、今度はマッチ売りの少女にもう一つのサファイヤを届けるように王子は燕に頼みました。王子の目は見えなくなりました。燕は決心します。目が見えなくなった王子のそばにいようと。燕は町の中で貧しさのために苦しんでいる人たちのことを王子に伝えるようになりました。今度、王子は自分の体をおおっている金をはがして届けてもらうようになりました。燕は王子の言う通り、王子の体から金をはがして届けました。王子の体はだんだん、見すぼらしくなっていきました。やがて、雪の降る日、燕は死んでしまいます。すると、王子の体の中にあった鉛の心臓が2つに割れてしまいました。町の人たちは見すぼらしくなった王子の像を取り壊してしまいました。その晩のこと、神さまは天使をその町に遣わし、その町で最も美しいものをもって来るように言います。天使が持ってきたのは、死んだ燕と王子の鉛の心臓でした。神さまは、この燕と王子に永遠の命を与え、二人を誉めたたえたのでした。

ざっと、そういうストーリーです。王子は自分が生きていた時は、王宮にいて民衆の苦しみを知ることはなかったのですが、自分が死んで像になったことで町の広場で民衆の苦しみをつぶさに見るようになって、この世における自分の存在意義を問い返すようになったのです。王子として王宮で生きているときは,ペトロと同じように、自分の根本的な弱さに直面することはありませんでした。けれども、自分が死んで町の広場で像となって初めて、自分の意志では何もできない美しい見た目の銅像になってみて、初めて自分の意志としては貧しい民衆を助けたいのですが、いかんせん、自分は身動きの取れない銅像である。何も主体的に出来ない銅像になって初めて、涙を流して、生前の自分が民衆の現実に気づくことなく生きてきたかを思い知ったのでした。だから、補助者の燕が自分の意志を代行するようになって、自分の目が見えなくなっても、愛を与え続けることができたのです。けれども、銅像の王子は自分の力では何もできなくて、見すぼらしくなってしまうと町の人たちに取り壊されてしまうのです。こうした王子の姿は、何も自己犠牲的な行動ではありません。自分自身の存在を失うような事態に直面して初めて、神の愛にふさわしい存在になることが、神の愛に生かされている者には与えられるという物語なのです。

私たちは誰しも、現実には神の愛にふさわしい存在ではありません。そういう自己理解がありながらも、主イエスから「わたしを愛しているか」と問われているのです。そのように問われたら、ペトロと同じように、「主イエスを愛しています」とは言い切れない自分に直面するしかありません。けれども、私たちの愛が決定的に不足している自分だからこそ、その弱さを含めて主イエスによって愛されている。その主イエスの愛が届いているからこそ、主イエスは私たち一人ひとりに向けて、「わたしを愛しているのか」と問うかたちで、愛を注ぎ込んでくださっているのです。